

STEFANO JEFF BLUES

Midnight Piano Stories

三幕の物語

ピアノとともに記憶と静寂をめぐる旅。終電から夜明けの
最初の光まで。

三つの幕、ひとつの夜

ACT I

Arrival

夜は、到着から始まる。

薄明かりのなかで列車が速度を落とし、遠い灯りと静かな通りのあいだに、見知らぬ街が姿を現す。彼は眺め、耳を澄まし、手がかりを探す。郷愁と好奇心と内省のあいだで、夜はゆっくりと扉を開いていく。

旅への入口、発見、そして待つ時間。

ACT II

The Night

街は消え、夜だけが残る。

記憶が浮かび上がり、思考は断片になり、時間は宙に止まったように感じられる。雨と影と反射のなかで、彼は眺めることをやめ、自らの内側の世界へ深く沈んでいく。感情は脆さと自覚、憂いと希望のあいだで揺れ続ける。

没入、内省、変容。

ACT III

Closing Time

どの夜にも、別れの時が訪れる。

灯りはひとつずつ消え、音は遠ざかり、夜明けが静かに近づく。すべての問いに答えが出るわけではないが、旅は新しい自覚を残していく。夜は騒がしさもなく去っていく。記憶のなかで生き続ける旋律の、最後の一音のように。

受容、別れ、静けさ。

Arrival は夜へ入る瞬間を語り、The Night はその感情の核を探り、Closing Time は朝の光へとやわらかく導く。



ACT I · ARRIVAL

夜は、到着から始まる。

旅への入口、発見、そして待つ時間。

01 Late Train

列車が夜を横切り、まだ知らない街に停まる。待つ時間と戸惑いのあいだで、旅は宙づりの空気のなかに始まる。細部のすべてが夢に属しているように見える。

02 Blue in Bologna

通りは記憶というフィルターを通して形を得る。ブルースは都市の郷愁となり、柔らかな灯りと孤独な足音のあいだから、記憶がゆっくりと立ち上がる。

03 Left Hand Stories

ピアノのもっとも低い音が、隠れたままのものを語る。憂いと静寂と内省のあいだで交わされる、自分の思考との親密な対話。





ACT II · THE NIGHT

街は消え、夜だけが残る。

没入、内省、変容。

04 Broken Chords Serenade

夜はその脆さを見せる。砕けた和音が未完の記憶と宙に浮いた問いを呼び起こし、不確かさを物語へと変えていく。

05 Rain on the Keyboard

雨が歩みに寄り添う。繰り返されるリズムと軽やかな旋律が、濡れた舗道に映る街を描き出す。静かな観想のなかに沈んだ街を。

06 Smoke on the Ivory

音と沈黙が、煙のように空気へ溶けていく。宙づりの音風景のなかで、現実と想像は混ざり合い、やがてひとつになる。

07 Minor Keys, Major Keys

光と影が同じ物語のなかに共にある。短調と長調の対話が、人の感情の無数の濃淡を探っていく。



ACT III · CLOSING TIME

どの夜にも、別れの時が訪れる。

受容、別れ、静けさ。

08 Last Glass for the Bar

店はゆっくりと空いていく。最後まで灯る明かりと、夜の最後の思いのあいだで、別れの前の時間はゆるやかになる。

09 Lights Off, One More Chorus

灯りが消え、夜が退いていく。最後の旋律は決定的な結末を求めず、記憶と想像のための余白を残す。



Midnight Piano Stories が語るのはひとつの夜。けれどそれは、すべての人の夜の話でもある。

見知らぬ場所への到着、自分の記憶との出会い、途方に暮れる時間、意味の探求、そして最後に手放す力。九つのピアノ独奏曲を通して、物語は映像のない映画のように展開する。沈黙が語りの不可欠な一部となり、どの旋律も内側の世界へ窓を開く。

このアルバムは曲集というより、真夜中すぎの散歩である。

記憶と想像のあいだを行く旅。

街が眠り、語ることでできる声がピアノだけになる時刻に、低い声で語られる物語。

Stefano Jeff Blues